

近藤家宛の鉄斎書簡

松山市三津浜在住の近藤文太郎氏と鉄斎との交際の端緒については詳しくはわからないが、おそらく明治17、8年頃から親交があったものと思われる、のち大正8年に文太郎氏が亡くなってからはその子息弥一郎氏と鉄斎の没年まで交際がつづいていた。この間40年余りにわたって鉄斎が書きおくれた書簡96通が遺っている。これらの書簡の内容は、近藤家から毎年恒例として歳暮や中元に贈られた伊予名産の海産物を受けとったときの礼状が殆んどであるが、ときには近況自詠の和歌や俳句を添えたもの、あるいは返礼として贈る自作の書画に対する見解を述べたものが含まれている。

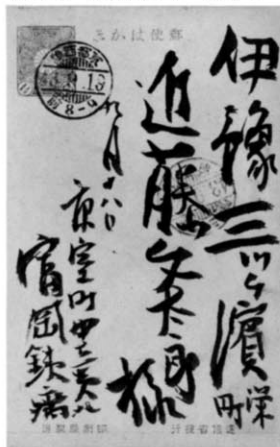
海産物商を営む近藤氏は、豊かな趣味をもった人であつたらしく、弄竹と号し、手製の竹箆を鉄斎に贈ったり、書画の鑑賞の上でも鉄斎のよき友であつたようである。ことに鉄斎がまだ50才頃には、松山方面においてその作品を周旋し、潤筆料の取りたてまで面倒をみていることや、伊予出身の鉄斎の妻春子も近藤家を訪ねていることなど深い交誼のほどがうかがわれる。

明治18年の正月には「尚別紙喜久魚のざれ歌御目にかけ候 不都合ナラ何回ニテも改書可仕候」と書いている鉄斎も、年とともに画家として著名になり、同25年には山陽地方で鉄斎の二男と称し、あちこちで還暦寿筵の祝酒料を詐取してあるくものがあらわれるようになっている。同40年、古稀をこえてからは、筆債に老令の身は堪えかねて、「何分一人の手二万人之依頼当惑土壌観音之感慨致申候」とその心境をしるしている。

これらの書簡には竹輪や魚の絵が、墨でかき一筆描きに添えられ、また封筒にはシールがわりに魚の絵が描かれている。

このように長い年月にわたって飾らぬ心情を書きおくれたこれらの書簡は、人間鉄斎の生涯を知る上にも貴重な資料である。

絵葉書（明治43年・75才）



季刊 美のたより No.10

昭和44年 6月1日

発行 大和文華館